忘れられた作家・鶴田知也を読む　～北海道・開拓・アイヌ～

SF 乱学講座 2013.10.06　東條慎生・岡和田晃

●鶴田知也とは

1902-1988　九州福岡県豊津町（現みやこ町）生れ
キリスト教社会主義から神学者をめざす 葉山嘉樹の誘いによってプロレタリア作家に
「コシャマイン記」によって第三回芥川賞 1936　『ハッタラはわが故郷』によって第四回小学館児童文学賞受賞 1955
戦後　秋田県で議員や市長に立候補するも落選　社会主義文学団体や農業運動の指導者へ
晩年は草木画、紀行文等に専念する

はじめに

忘れられた作家　四十年作品集が刊行されなかった
講談社文芸文庫での作品集の刊行　年譜、注釈、作品選定（小正路淑泰）、解説（川村湊）
北海道近代の表と裏　開拓とアイヌ

1　プロレタリア作家鶴田知也

●鶴田知也の故郷
九州福岡県豊津（みやこ町）　堺利彦、葉山嘉樹と同郷　葉山がモデルの短篇「わが悪霊」
鶴田の父の家には葉山が出入り　キリスト教社会主義にめざめる
都築省三**『村の創業』 1917** から北海道八雲町に関心
八雲出身の友人と北海道へ　極寒の自然、酪農、アイヌとの出会い「第二の故郷」

●デビューするまで
葉山の誘いで社会主義運動に　出獄した葉山が人気作家に　葉山に誘われ東京へ
プロレタリア文学誌「文芸戦線」からデビュー**「子守娘が紳士を殴った」 1927**
蔵原惟人に評価された**「海鳴り」 1928**　プロレタリア文学運動の内紛と分裂

●「闇の怒」 1928　アイヌの象徴するものはなにか
北海道の雪原　農場主と下男の一対一の対峙　アイヌと下男　信頼と裏切り
●プロ文運動解体期
権力の弾圧　組織の合同と主導権　多喜二虐殺と転向　プロレタリア文学運動の終焉

2　戦時下の芸術

●「コシャマイン記」 1936
伊藤永之介との同人誌「小説」に発表　1936/02　二・二六事件の空気
第三回芥川賞受賞（小田嶽夫「城外」と同時）　菊池寛とは敵対する文学集団
文体は文語訳聖書の影響　渡島半島を舞台　シャクシャインの戦いと同時期か
左翼運動の挫折をアイヌの蜂起に重ねたもの　「けだるい絵空事」と伊藤永之介に酷評
●当時の文芸時評　『文藝時評大系』より
勝本清一郎「未開民族を資本主義の発展過程が押し倒してゆく姿」を捉えた作品
保田與重郎「露骨な野蛮」「我々の歴史と文化とに関係のない生物学的範疇のもの」
●「北海道文学」史における「コシャマイン記」
和田謹吾「アイヌ問題を的確に描いた最初のもの」『風土のなかの文学』北書房 1965
上笙一郎「児童文学における「突出」」　『植民地児童文学史稿』「日本古書通信」連載中
●植民地主義批判という自己否定
「仮想」と「実験」による時局への抵抗
北海道農民を題材とした自分の小説の否定ではないか？

●「山岳を征く部隊」 1938　日中戦争
戦時下の芸術を称揚し、「戦時」の論理と「平時」の論理を対置する
「死んだ真似」をした「俺は卑怯だったろうか？」
虐殺された多喜二と生きながらえた自分への言及？

3　翼賛文学へ

敗残者、隠遁者を描く　北方農業への希望を抱く主人公たち
北方への進出のため、北海道農業の経験に学べ、と主張　進出の拠点・北海道

●『土の英雄』 1944
童話をリライトした少年小説　国会図書館でインターネット公開
舞台「ワッカピラ」　出征により父不在の少年が農業に勤しむ
父の夢だった牛の飼育　出現した熊を人々との協力で倒す⇔「ペンケル物語」
「草木と獣物の空地に日本人を入れようとしない周囲の欲の深い国々」
膨張政策と直結した銃後の農業少年という「土の英雄」

●『アッツ島』 1944 初版二万部　戦闘部分全削除　アリュート人抑留
●戦後のＧＨＱ検閲
『若き日』の一部削除　『家庭の幸福』修正　『神々の日』発禁

4　戦後の鶴田知也

戦後　伊藤と秋田へ疎開　秋田で議員、市長に立候補　文学団体結成　雑誌編集
多数の単行本未収録短篇や童話等を書く　戦後創作は 60 年代まで続く
●「アイヌ悲歌・コシャマイン叛乱」1961「アイヌ清左衛門の入牢」1963
戦後のアイヌ短篇において、アイヌに混じって生きていく男を描く
60 年代　農業雑誌編集長　農業運動指導者として活躍
70 年代　雑誌のカット描きをきっかけに草木画を多数描くようになる
昭和の終る前年に没。